

伊藤整

小説の方法・小説の認識

講談社

伊藤 整

小説の方法・小説の認識

講談社

小説の方法・小説の認識

定価 650 円



昭和45年5月20日 第1刷発行

著 者 伊 藤 整

発 行 者 野 間 省 一

発 行 所 株式会社 講 談 社

東京都文京区音羽2-12-21

郵便番号 112

電話 (942) 1111 (大代表)

振 替 東 京 3 9 3 0

装 幀 者 枡 折 久 美 子

印 刷 所 慶昌堂印刷株式会社

製 本 所 有 限 会 社 文 信 社

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。 © Sei Itoh 1970

Printed in Japan

1395-120377-2253(0)

目 次

小説の方法

序文

7

八 物語りの発想

76

一 小説への疑問

13

九 散文芸術の性格

89

二 理論と実作との距離

24

一〇 スタイルの発生

107

三 内なる声と仮装

31

一一 西洋の方法

114

四 環境と創作

40

一二 日本の方法

128

五 日本の場合

49

一三 附随的な推定群

145

六 放棄と調和

56

七 自我の作用

63

小説の認識

序文

157

ジョイスとグリーンの場合

228

芸による認識

160

諷刺の発想

242

現代文学の可能性

171

近代日本人の発想の諸形式

252

中間小説の近代性

179

組織と人間

289

本質移転論

187

我が秩序の認識

201

日本の人格美学

209

芸の技術と倫理

222

小説の方法

序 文

本書は「小説の方法」と題したが、それは、人生におけるどういう力の現われとして、どういう必然性があるか、かつまたどういう仕組みで小説が生まれるか、というほどの意味である。だからそれは、小説が何故、どういう風に人生の重要問題と関係があるかという事でもある。かつ小説作者というものは小説の中で何をどういう方法で書きたがっているのか、という事にもなる。読者の方から言えば小説を読んで面白いと思ったり感動したりするのは、一体どんな意味において、どういう考え方や書き方のためであるか、という事でもある。そのために著者は、小説ばかりでなく、詩や叙事詩や劇作のこと、日本やヨーロッパの社会の構造やその歴史、それから特に文学者の生活のあり方について触れねばならなかった。

ある程度小説や詩や戯曲を読んだ人たちは、色々な疑問にぶつかるものである。自分はこの作品を読んで

何故感動したのかという疑い、道徳的な話や美しい話と怖ろしい汚い話と、それが本当の小説なのかという疑い、小説は人生の赤裸々な真実を知るためにあるのか、それとも生きる道を学ぶためにあるのかという疑い、人物の多く現われる込み入った話と作者らしい人の孤独な生活の自伝らしいものと、どっちが本当の小説かという疑い、等である。

正直の所、それ等がそのまま、二十年も小説を書いて来た本書の著者が、長いこと気にかけていた疑問であった。こういう問題は一般の文学論では解決済みということになっている問題であるが、著者はそれ等のものに満足できない所があつて、自分流に何とか解決したいと考えたのである。

それ等のことをする上に著者が特に気を使ったのは、自分が読んで感服した作品には、何か重要なことが書かれているか、或いは重要な考え方や表現の仕方があるに違いない、それをただ感服していいいで、その一つ一つが何故、どんな風な仕組みで出来て居り、書いた人の生活や読んだ自分の生活とどう関係しているかを、理論的に考えようとした事である。そして色々な作家の色々な作品の持っている力を較べ、似た所や違う所を類別して見た。一番大きな類別は日本とヨーロッパである。しかしヨーロッパのものが、国によって時代によって違い、日本のものでも、あるものはヨーロッパに近いものがある。そういう違いを生む根本になるものとして、社会事情、気候風土、伝統などが考えられるが、特に目立つのは作者の育ち方と生活の環境であることが分つて来る。

また作品の質や形が、時代により国によって一定の類型ができるのは、氣質や習慣もあるけれども、そう

いう形や質がその社会に住む人に訴える力があることを、作家たちは、理窟でなく本能によって理解するかである。だから国や時代が違っても似たような社会状態の中では、本質的に似たような傾向の作品が生まれる。しかし環境の物質的条件が総てを決定するという結論には著者は達しなかった。従って物質的政治的な環境を描くことが最後の文学の道だという結論にもならなかった。また善や理想を描くことが最上の文学だという考えにもならなかった。弱い不完全なものである人間が生きているその生命の味を文字を通して伝えるのが文芸作品であり、色で伝えるのが絵であり、音で伝えるのが音楽である。普通の人が自ら毎日を通してしながら、はっきりと捕えることのできないで過ごしている自分たちの時代の自分の生命の味、その実質、それを純粹にして味わせるものが芸術であり、その一種として文芸作品、小説がある。そのためには小説には小説特有の特殊な方法があり、それは作者たちの気質と育ちと生活と時代とに深く関係がある、というのが大体の結論である。そして生命の存在の仕方としての社会状態や倫理の秩序と、その生命の認識としての感動や、その表現方法としての美の秩序等の間にある色々な関係を考えることが本書の内容をなしている。

著者が特に力を入れて書こうとしたのは、近代の日本の小説の特色のことである。またそれをヨーロッパの文学に較べると、どういう時代の、どの傾向の文学に似ているかということである。また人間の生命というものは、不安定な社会秩序と常に戦いそれを訂正する働きを続けながら、歴史の動きというものを作ってきた。それが近代日本文学ではどう働いたかということである。

本書では、色々な作品を例として挙げているから、その全部でなくても、大体のものを読者は読んでいなければならぬ。それは、

ヨーロッパでは、「ギリシャ神話」、「オディッセイ」、「イリアード」、「聖書」、ヴァーギルの「アエネーイ
ス」、ダンテの「神曲」、ボッカチオの「デカメロン」、セルバンテスの「ドン・キホーテ」、シェイクスピア
の「キング・リア」と「ハムレット」、ルソオの「懺悔録」、デフォアの「ロビンソン・クルウソウ」、フィ
ールディングの「トム・ジョーンズ」、フロオベルの「ボヴァリイ夫人」と「聖アントワヌの誘惑」、ラファ
イエット夫人の「クレヴの奥方」、スタンダールの「赤と黒」、トルストイの「イワン・イリッチの死」と
「アンナ・カレーニナ」、ドストエフスキの「永遠の夫」と「罪と罰」、モオパッサンの「水の上」、ポオ
の「アッシャー家の崩壊」と「ウィリアム・ウィルソン」、ゲエテの「ファウスト」と「ウィルヘルム・マ
イステル」、プルウストの「スワン家の方」、ラディゲの「ドルジェル伯の舞踏会」、ジイドの「窄き門」と
「法王庁の抜け穴」、トマス・マンの「ブッデンブローク家」、チェーホフの「退屈な話」と「桜の園」、ゴ
ッゴリの「死せる魂」、ジョイスの「ユリシイズ」と「若き芸術家の肖像」、マルロオの「人間の条件」等
である。

日本では、「源氏物語」、「枕草子」、「徒然草」、「方丈記」、西鶴の「好色一代男」と「好色一代女」と「近
世艶隠者」、近松門左衛門の「天の網島」、「二葉亭の「浮雲」、蘆花の「思い出の記」、露伴の「運命」、藤村
の「破戒」と「家」と「新生」、秋声の「あらくれ」と「仮装人物」、花袋の「蒲団」、白鳥の「何処へ」、秋

江の「黒髪」、泡鳴の「断桥」、鏡花の「歌行燈」と「高野聖」、漱石の「吾輩は猫である」と「明暗」、鷗外の「妄想」と「蘆江抽斎」、荷風の「妾宅」と「遷東綺譚」と「腕くらべ」、宇野浩二の「蔵の中」、葛西善蔵の「子をつれて」、有島武郎の「或る女」と「カインの末裔」、志賀直哉の「暗夜行路」と「城の崎にて」、芥川龍之介の「鼻」と「河童」、武者小路実篤の「或る男」、佐藤春夫の「美しい町」、横光利一の「機械」と「上海」、川端康成の「雪国」と「禽獣」等である。日本の作者では、それぞれの作家のものを好みによって、もっと多く読む方が望ましい。

一九五一年五月

伊 藤 整

一 小説への疑問（序論として）

第二次世界戦後一年目の頃、私は日本の私小説と作者の身の上話との混雑のことを、ある新聞の文芸時評に書いた。その後二度ほど出席した座談会で、その問題が再提出され、結局その度に結論のない論議のきつかけとなった。そしてそれ等の座談会で逢った人には、たとえば舟橋聖一、林房雄、丹羽文雄、木々高太郎、江戸川乱歩というような、多かれ少かれ、所謂私小説反対論者があつた。そして、その論及された文芸時評で、私小説の弱点を取り立てて論じた私が、言わば私小説弁護者の立場に立たされるといふ形になつたのである。

第一議論を立てる場合に困るのは、論難される場合の私小説と、弁護され、または主張される場合の私小説はちがつてゐるようであるし、私小説そのものが、今の日本の文壇では、たとえば、川端康成、堀辰雄型、それから、尾崎

一雄、石塚友二、上林暁型、それから、北原武夫、太宰治、高見順型まで、また宮本百合子、徳永直、中野重治型までの間に大變隔りがあるし、また現在かなり大きく変化しつつある、ということに触れずに漠然と取り上げているという大ざっぱさが、特に考えられねばならないだろう。

これを論議する側においても、「私小説は本格の小説と違ふ」という立場で論難する林房雄、丹羽文雄、舟橋聖一的態度が一群あり、またある種の私小説の中の「封建的あるいは資本主義社会の個人意識的執着の悪い独善さ」を有害であると見る岩上順一、小田切秀雄的な批評態度が漠然と区別される一群をなしている。

以上の区分は、かなり粗雑なものであるが、こういう風な略図の設定にしても、岩上順一が試みた以外には、特にはつきりと為されたこともないようである。また文学作品の中から、今の小説にある西欧の写実主義的要素と自我意識究明の要素、それから體質的にまた伝統的に我々日本人の持つてゐる随筆文学の系統、それから純粹な論理となり得ないで形象を借りてはじめて表現される日本流の思想発表の方法、また現実逃避と諦観の文人的脱俗生活の好みなどを取上げて見ることも面白いであらう。

しかし、私は現在の日本の小説を論ずるのに「私小説と本格小説」というような形式で論ずることは、大して意味

あることではない、と思つてゐる。それはほとんど、かえつて日本のジャーナリズムが作家に課する作品発表方法として論ずる方がはつきりする。そして新聞の発行部数と大衆雑誌の発行部数、それから評論雑誌や文芸専門雑誌の発行部数と読者の質の問題として取りあげた方がはつきりするのである。しかしそういう根源をつつかずに、作品の中に作者の身の上話が多いという結果のみを取り上げるのは、日本的な習慣であるから、それに特に反抗しない限り、私小説という言葉から現代小説論をうち立てるという便宜もあるのである。ただこの「私小説」という言葉の意味の混雑をうまく避けることが出来さえすればであるが。

私が前記の時評で、私小説の積極面として取り上げたのは、その中の思想表白の手段としての私小説の形式のことであつた。繰りかえしになるけれども、一部分を引用するならば、

「たとえば正宗白鳥の『交友録』を読むとする。するとその作品の中の岩本というのが岩野泡鳴であり、K博士が河上肇であるということをしるが如く推定し、そういう人物の性格と経歴を知り、かつ白鳥その人の思想傾向や経歴を知つてゐる人でなければ、到底この作品を味うことはできない。

(中略) そういう支えや準備は読者の方で負担しなければならぬのである。これが小説であらうか。これ等の作品

は文学史的感想と呼ばれるのが至当ではあるまいか。(中略) そこには自惚れと気楽さと無責任と共に、尊敬すべき謙遜、遠慮という徳性さえ發揮されている。驚くべきことである。日本の現代小説を無邪気な読者に理解させるために、某氏は実に多忙な流行作家であつて、執筆多忙のため作中人物は名前のみあつて描写の何もないことがあるけれども、特に説明なき限り、作中の主人公は作者自らなりと了解されたし、という断り書きを、編輯者が見出しの下に書き忘れてゐるのは実に残念なことだ。(中略) しかし念のために言つておくが、こういう遠近法の完全な欠除のために日本の現代小説が悉く下らないかというところでもないから困るのだ。白鳥の『交友録』の思想などは、まことに面白いのだ。日本の小説家に思想がないとはよく言われて来た言葉だが、私の考えはむしろ反対である。(ある種の)日本の小説には思想しかない、と言つた方がはるかに適切である。」

つまり正宗白鳥の作品などは、日本文学の系列としては「方丈記」や「徒然草」などの系列におけば、うまく坐るのではないかと私は思うのである。そして、それで大変結構であるし、現代日本人にとって名譽なことでもある。私が上記の引用文で省略した、一般的気易さを非難したような苛々した言い方で、この種の作風をさまで論じ難ずる